

先進校に学ぶキャリア教育の実践

探究を重視した多彩な実践を通じて 自ら将来をデザインしていく主体性を育む

市立札幌開成中等教育学校 (北海道・市立)

探究を軸とする学校づくりを掲げて開校し、新しい学校づくりの最中にある市立札幌開成中等教育学校。未来社会を見据えたキャリア教育にも力を入れ、各教員の自由な発想でさまざまな活動を立ち上げてきました。そのなかで育ち、2018年春に初の卒業生となった1期生は、どんな力を身に付けて巣立ったのでしょうか。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍6年間一貫教育 🔍探究 🔍IB(国際バカロレア) 🔍地域連携

6年間の学びの連続性のなか 存分に探究できる学校

市立札幌開成中等教育学校は、「探究」に重点を置く、札幌市立初の中等教育学校だ。キャリア教育においても、自ら将来を探究していくためのユニークな実践を行っている。その詳細に入る前に、基盤となる学校全体の成り立ちから紹介していきたい。

同校は2015年度、「6年間の連続した学びを生かして、札幌で学んだというアイデンティティを持ちながら、将来の札幌や日本を支え国際社会で活躍する、知・徳・体のバランスのとれた自立した札幌人」の育成を掲げる中等教育学校として誕生した。前身校である札幌開成高校の伝統やSSH、SGHの事業を引き継ぐ一方で、新しい市立学校の一つのモデルを示すというミッションをもち、先進的な手法や革新的な発想を取り入れながら学校づくりに当たっている。

学校教育目標には、「自ら課題を発見し生涯にわたって学び続ける力」「自己を肯定し多様な価値観を認め合う心の余裕」「未知なるものに挑戦し自ら道を切り拓く勇氣」を大切に、「生徒のすがた」とともに、それを支える教職員や保護者などの「大人のすがた」も設定している(図1)。同校に立ち上げから関わる校長の相沢克明先生はこう語る。

「目指す生徒像に向けて教職員が引張るのではなく、あくまで生徒自身が『生徒のすがた』に向けて主体的に資質・

能力を伸ばしていく。そのための環境整備を、教職員をはじめとする私たち大人が推進していく。そのことを生徒、保護者、教職員で常に意識できるように、学校教育目標として掲げています」

学校教育目標実現に向けた具体策の核が「探究」だ。6年間を基礎期・充実期・発展期の3つに区分し、段階に合わせて課題探究的な学習を確実に推進するツールとして、IB(国際バカロレア)を導入(図2)。すべての授業において、「探究・行動・振り返り」が双方向に展開するIBの学習サイクルを取り入れた実践を目指している。

また、授業は50分×2コマ(連続)を1セッションとした日課時程を編成。探究型の授業にじっくり取り組めるようにしている。「例えば理科では、教員の指示どおりに実験するのではなく、生徒自身が考えながら取り組む余裕ができました」(進路指導主事・杉淵宏志先生)

さらに、昼食時間後の50分間は、生徒の自主的な活動のための時間「コマタイム」として設定。何をしても自由だが、集まって探究活動を行う生徒の姿もあちこちに見られる(左ページ写真)。「高校受験に追われないゆとりある6年間のなかで、生徒がやりたいことを見つけて存分に探究し、力を伸ばせる学校を目指しています」(相沢校長)

主体性を重視した キャリアデザインプログラム

同校のキャリア教育は、このような主



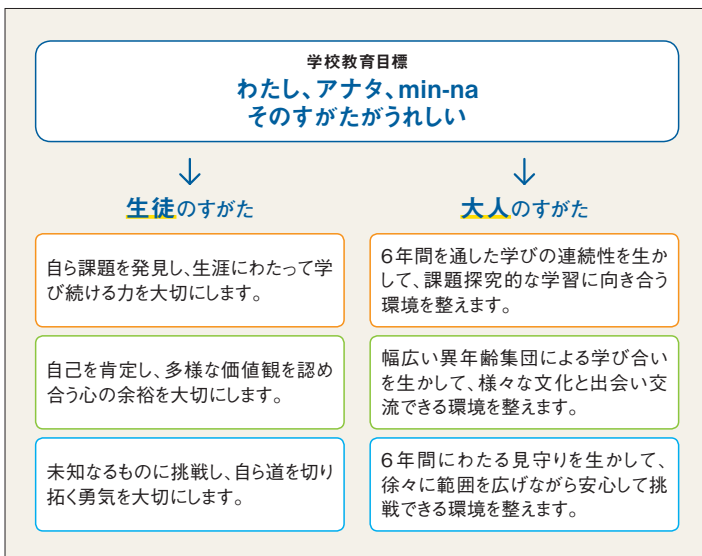
School Data

2015年設立/コスモサイエンス科
 生徒数950人(男子522人・女子428人)
 進路状況(2018年3月卒業生)
 大学98人・専門学校2人・その他55人
 北海道札幌市東区北22条東21丁目1-1
 TEL 011-788-6987
 URL <http://www.kaisei-s.sapporo-c.ed.jp/>

Outline

2015年、北海道札幌開成高校を改編し、札幌市立初中等教育学校として開校。1期生(後期課程編入)と4期生(前期課程入学)の2つの学年でスタート。課題探究的な学習の推進のためIBのプログラムを導入。17年3月にMYP(ミドル・イヤーズ・プログラム)、18年9月に日本語DP(ディプロマ・プログラム)認定。平成26年度スーパーグローバルハイスクール(札幌開成高校として指定)。平成29年度スーパーサイエンスハイスクール(2期目)。

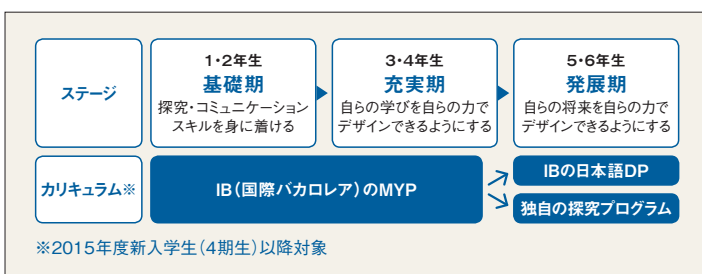
図1 市立札幌開成中等教育学校の学校教育目標



体的な探究を重視する学校の方針を踏まえたものだ。キャリアデザインプログラム「SELF」という枠組みで、さまざまな場面での取り組みを行っている。「SELF」という名称には、「本物に触れる刺激的な体験をするなかで自身の学び、将来について自分の力で考え実践していく」という同校キャリア教育の理念が込められている(図3)。設計に関わった黒井憲先生は、そのポイントをこう話す。「最大のキーワードは、主体性の育成です。そのために、生徒が自ら動ける環境整備と、自己決定する場をたくさん設定することに力を入れました」

開校時、1期生(後期課程編入)と4期生(前期課程入学)の2つの学年でスタートした同校では、まず1期生学年団が始めたさまざまな実践が、学校全体の取り組みへと発展した。ただし、2期生以降がすべての内容を引き継いで実施しているのではなく、内容の3割前後は、生徒の状況に合わせてアレンジしたり、新しい実践を取り入れたりしている。「プログラムを作るだけでなく継続させることが大事だといわれますが、同じことをそのまま続けることにはあまり意義を感じていません。新しいことに挑戦する子どもたちを育てたいので、僕たち自身も新しいものを作り続ける姿勢を大切にしたいと考えています」(黒井先生)

図2 6年間を通した学びの連続性



「SELF」の取り組みの一つひとつは、自分で考え行動すること(See)、仲間と協働して作り上げること(Cooperate)、既存のものを組み合わせで新しいものを生み出すこと(Plus-on)という、3つの視点で設計されている(図3)。それが色濃く反映されているのが、進路探究学習「フューチャー・ジョブ・セッション」だ。目先の進路ではなく将来的に社会でどう生きていくかに焦点を当てたもので、総合的な学習の時間などで年3〜8回程度実施している。活動回数は多くはないが、SGHやSSHの事業で実施する海外研修やフィールドワークなどの実体験や、教科学習で得た知識・スキルの学習との相乗効果も期待できる。取り組み内容については1期生の実践を基に6年間のモデルプランを作成し、各学年で実施している(図4)。おおまかな流れは、まず、AIやロボットの進化が目覚ましい社会を見据えながら、多様な



ある日のコスモタイムでは、「開成生を国際人にする」を掲げる探究グループが、外国人教員との座談会を実施していた。ほかの教室では、「エゾタンポポの繁殖」や「津波災害に強い防波堤とは」などをテーマに実験・観察に自主的に取り組む生徒たちの姿も。

変化する未来社会を見据えた 仕事や働き方を協働で考える



フューチャー・ジョブ・セッションの様子。今ある仕事から進路を選ぶのではなく、これから必要な仕事を作るという視点を学ぶ。

図3 キャリアデザインプログラム「SELF」の意味と3要素

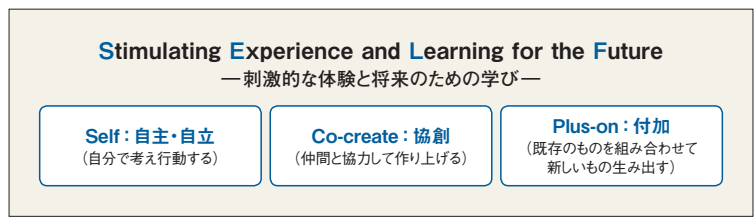


図4 進路探究学習「フューチャー・ジョブ・セッション」6年間のモデルプラン

ステージ	基礎期(1・2年)	充実期(3・4年)	発展期(5・6年)
テーマ	仕事と社会	自分と仕事 自分と未来	自分と未来と社会と…
サブテーマ	仕事を知る	仕事をつくる	世の中をつくる
目的	社会にある仕事・職業理解を深め、仕事と社会、仕事と仕事のつながりを探究し、「働く」とは何かを考える。	仕事を通じた社会への貢献を考え、社会問題とその課題について探究し、理想的な未来の姿を示す。	自分が自分らしく生きていくために必要な思考と行動を探究し、よりよい社会と自分の姿を明確にする。
目標	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い業種・職業を知ること、社会と仕事の関わりを学ぶ。 教員以外の社会人と出会い、仕事に対する思いや実践を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 仕事果たす社会への役割を明確にする。 自分が果たしたい社会への役割を明確にする。 仕事を通して果たしたい社会への貢献を明確にする。 社会問題を明らかにし、具体的な解決策を探究し示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 未来の使命を果たすために必要な進学先について探究する。 クラウドファンディングの実践から、他者を巻き込むマインドを知る。 イントラプレナー、アントレプレナーとして企画書を作成する。
活動例	<ul style="list-style-type: none"> 「おかし」が手元に届くまでを徹底説明、徹底追跡! よくわからない仕事、会社を徹底分析! 	<ul style="list-style-type: none"> 偉業を成し遂げた自分史を作ろう! 社会問題に切り込む! プラスオンジョブを作ろう! 	<ul style="list-style-type: none"> 起業家体験! あなたが社長なら何を!? よりよい未来と社会を生み出すアクションを!

「やりたいかを考え、各自のキャリアプラン作成や、「Plus-on」の考え方で社会課題を解決する事業を提案する探究活動などにも取り組むというものだ。

事業提案の活動では、例えば、あるグ



仕事や働くことについて、外部講師による講演やグループワークなどを通じて理解を深める。そのうえで、仕事を通してどのように社会に貢献していくかを考え、各自のキャリアプラン作成や、「Plus-on」の考え方で社会課題を解決する事業を提案する探究活動などにも取り組むというものだ。

「未来のことを考えるものなので、僕たちは『先生』として正解を教えることはできません。生徒と同じ方向を見て、一緒に考えることを楽しみたいと思っています」(黒井先生)

今後は、事業を提案するだけでなく、

クラウドファンディングの仕組みを活用するなどして実際にアクションさせることも検討しているという。

「狙いは、起業家の育成ではなく、人と協働したりアイデアを組み合わせたりすることで自分の思いを形にするプロセスを体験すること。社会に出て挑戦したいことができたとき、高校時代の経験を活かして行動できる人になってほしいのです」(黒井先生)

外部団体と連携した他校生との協働プロジェクト

また、学校の枠を超えてチャレンジする場として、4・5学年希望者対象に選択科目「キャリア・ライフ・デザイン」を設置し、2つの課外プログラムを実施している。どちらも外部団体と連携し、他校の参加者と共に学び合うものだ。

その1つは、北海道の食への意識を高め、自身のキャリアについても見つめる「アマドール・プロジェクト」。黒井先生もメンバーとして多様な職業の社会人と共に活動している。生産者と生活者をつなぐ団体「アマドール」が提供する、高校生向けプログラムだ。農業体験や農産物販売体験、レシピ開発、地元農産物の広報動画作成などに取り組んでいる。

もう1つは、TEDの基本精神に基づく「TEDxSapporo」が主催するイベントでプレゼンを行うプログラムだ。自分の経験を振り返りながら、伝えたいアイデアを掘り起こし、その集大成としてプレゼンを実施する。

「社会人や大学生が関わることで、僕たち教員が伸ばせない面を伸ばしていったらと考えています」(黒井先生)

メンター選択権を生徒に与え、三者面談は「自分プレゼン」

進路指導も「SELF」の二環に位置付け、独自の方法で実施している。いくつか例をあげてみよう。

偶数月に実施している個人面談では、生徒が面談相手の教員を指名する。学年団の教員が得意分野をあげた一覧表を見て、生徒は相談したい教員に面談を申し込む。「哲学」をあげた相沢校長のところにも、生徒が相談にやってくるという。面談は、生徒が事前に進路希望や悩みなどを記入して持ち込む「面談カルテ」(図5)を基に行い、話した内容を担当教員がさらにカルテに書き込んだうえで、担任をはじめ学年団全体で共有している。

この面談期間中には、面談の空き時間を利用して、希望する進路分野が同じ生徒が集まる「キャリアコミュニティ」の活動が行われている。学年団によって「ミニニティ」の種類は異なるが、医師、看護師、教師など定番化しているものも。ここでは生徒同士が情報交換するほか、例えば医師志望コミュニティでは現職の医師を招いてディスカッションしたり、教員志望コミュニティでは教育実習生のように他学年の授業を見学したりと、その進路に必要なマインド育成のための体験的な企画も実施している。

また、年1回の三者面談は、生徒が担



進路支援チーム
黒井 憲先生



進路指導主事
杉渕宏志先生



校長
相沢克明先生

選択科目 「キャリア・ライフ・デザイン」の活動



アニメドレープロジェクトでは、農業体験するだけでなく、地元農家の支援につながるさまざまな活動に取り組む。



「TEDxSapporoSalon」でプレゼンを行う生徒。自分の経験の振り返りから始め、約5カ月間かけて準備してきた。

ダウンロード可
図5 面談カルテ

生活・身体・心・学習の状況や、悩み、進学希望先などを生徒が記入。面談を担当した教員は、下欄に面談内容を記録する。

それ象徴するのが、3学年のクラス編成を生徒自身の手で行ったことだ。学校側が出した条件は「各クラス・学年全

生徒自身の手で クラス編成を実施

18年春、同校で初めての卒業生として1期生が巣立った。3年間担任を務めた黒井先生は、1期生の成長について「特に主体性やチーム力で物事を前に進める力が育った」という。

任と保護者に対して行う「自分プレゼン」だ。各学年が設定する「将来の夢・成績と学習計画の現状分析」「英語で自身のことや将来の展望を語る」などのテーマについて、情報科などと連携して各自が作成した資料を用いながら、生徒が自分の言葉で語る。生徒は自ら語ることで進路に対する意識を高める。保護者からは、子どもの考えやプレゼンする姿に感激したという声が多くあがるという。

体がしっかりと学校生活を送れる状態にする」のみ。男女比や成績バランスも問わず、生徒に任せた。ボードの希望クラス欄に自分の名前カードを貼ることで意思表示するという方式で、2週間の期間内は名前カードの貼り替えも可能。生徒間の相談や調整を行いながら、最終的に日々の授業や学校行事への影響も考慮されたクラス編成ができた。

「大事にしたかったのは、『自分で決めた場所ががんばろう』という主体的な姿勢です。初期にはなかったアイデアですが、生徒の成長していく姿を見て、『この生徒たちだったらクラス編成を任せられる』と考え、SELFの集大成として実施することを決めました。思い切って実践してみて、生徒の意識が一段上がったように感じました」(黒井先生)

進路選択の場面では、前身校時代とは異なる傾向が見られた。例えば、これまで工学部・理学部に集中していた理系

Interview

「何の仕事をするか」から「その仕事で何をするか」へ

●小さいころから食に興味があって、将来は管理栄養士を目指しています。食べることは体づくりの基本です。みんなにちゃんとしたものを食べてほしいですが、今、忙しい共働き家庭が増えているなか、単に「インスタント食品はダメ」と言うだけでは改善されないでしょう。だから、食を通じた家族の在り方や、インスタントを上手に活用した食生活が提案できる管理栄養士になれたらと思っています。



そんなふう将来を具体的に考えられるようになったのは、2年連続で参加している「アニメドレー」の影響が大きいです。農業体験やお弁当開発に取り組むなかで、食や農業の大切さや問題点について知識として知るだけでなく本当に「わかった」気がします。また、私たち高校生の力はすごい、とも実感しました。「アニメドレー」の活動をもっと広げ、高校生のパワーでいろんな人に食の大切さを伝えていきたいです。(5学年・植村 晴さん／写真左)

●私は以前、人と接するのが得意ではありませんでした。昨年度、軽い気持ちで参加した「TEDx」のプログラムでも、他校生と思うように会話が続けられず、ふがいなさを感じました。こんな自分のまま大人になりたい。だから、いろんな事に挑戦してみよう。今年度の「TEDx」では大人や大学生に交じって運営スタッフもやってみました。いろんな人と出会い、コミュニケーションの面白さに気づき、成長できたと感じています。そんな私が先日の「TEDx SapporoSalon」で発表したテーマは「人とのつながり」です。自分の経験を基に、皆さんも勇気を出して人とつながってみませんか？とお話しました。

将来の目標は、理学療法士と柔道整復師の2つの資格を取得することです。北海道胆振東部地震をきっかけに、このような災害発生時に両方の仕事ができれば、より人の役に立てると考えたからです。患者さんに不安な気持ちも吐き出してもらえ、心のケアもできる医療人になりたいと思っています。(5学年・柴田 絢さん／写真右)

の進学先に農業系が増えるなど、進路分野が多様化しており、取り組んだ探究テーマとの連動も見られる。探究の経験は、国立大学を含めたAO入試利用にも活かされ、進路実績を押し上げた。また、海外大学進学者が5人あり、グローバル人材の育成に力を入れてきた影響がうかがえる。

2年後の開校6年目で、中等教育学校としての完成年度を迎える同校。節目に向けて学校づくりを続けていくなか、相沢校長は教員からの自主的な提案ができる限り応援していく方針だ。また、それを可能とするための、業務の整理や効率化などの環境整備にも一層力を入れていくという。

「教員が上から言われたことを無理しながら取り組んで、新しい学校のプログラムや体制の形が完成しても、それで目指す生徒を本當に育てることができようか。生徒が将来、幸せに生きていくためには、学び続ける力が必要です。生徒が、学ぶことは楽しいと思えるよう、教職員一人ひとりが、主体的に変革や新しい挑戦を楽しんでいる学校にしていきたいと考えています」(相沢校長)